



江戸時代の社会における遊女 一京都の島原遊廓を中心に一
Sarah Vallette d'Osia

► To cite this version:

Sarah Vallette d'Osia. 江戸時代の社会における遊女 一京都の島原遊廓を中心に一. *Kyôto-gaku reki-saikan kiyô* (Bulletin of Kyoto Institute, Library and Archives) , 2021, 4. <hal-03241721>

HAL Id: hal-03241721

<https://hal.science/hal-03241721>

Submitted on 28 May 2021

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

Bulletin of Kyoto Institute, Library and Archives

vol. 4

<Articles>

Activities and identification of Kunihiisa, a vassal of the Hatakeyama clan,
in muromachi period KAWAGUCHI, Naruto

<Research Notes>

Photograph taken by Viscount IWAI Yukimasa OTSUKA, Katsumi

“Fusimi gimin to yougakuji” SUGIMOTO, Hiroyuki

Reprinting and introduction : historical materials related to Ziguohisen in
the “Medieval Documents in the Former Kyoto Prefectural Library and
Archives Collection” MATSUI, Naoto

The Incident of Yoshijima of Okikeomote (Oikeomote Yoshijima Ikken)
Office of the Early-modern History of Japan, Department of Historical
Studies, Faculty of Letters, Kyoto Prefectural University

<KILA Research Fellows Articles>

The Meaning of the Concept of “Fuju Fuse” and its Changes in the Medieval-
Early Modern Transition Dan SHERER

Courtesans in Edo period society:
The example of Shimabara pleasure district in Kyoto Sarah VALLETTE D'OSIA

The Cult of Nyohokyo in Medieval Japan within Buddhist Cultural
Interactions KUO, Pei-Chun

<Report>

The Project of KILA Research Fellows
Kyoto Studies Promotion Division

2 0 2 1

Kyoto Institute, Library and Archives

江戸時代の社会における遊女

—京都の島原遊廓を中心に—

Courtesans in Edo period society :

The example of Shimabara pleasure district in Kyoto

サラ・バレットドシア

Sarah VALLETTE D'OSIA

はじめに

江戸時代の売春婦には基本的に三つの類型がある。公娼であった公認遊廓の遊女・傾城・女郎、黙認された私娼である宿場の飯盛女や岡場所・花街の茶立女などの売女、非公認の私娼であった夜鷹・惣嫁・辻君などと呼ばれる隠売女である。

本稿では、遊廓に閉じ込められているとはいえ近世社会の中で生き、なおかつ江戸時代の文化を担った魅惑的な芸能者的存在であり、同時に風紀を乱すとされた娼婦でもあった遊女について論じる。

天正17年(1589)に日本最初の公認の遊里が京都二条柳町に開設され、これは後の慶長7年(1602)に六条三筋町へ、さらに寛永18年(1641)に朱雀野付近に移されて、島原遊廓(西新屋敷の傾城町)になる。江戸においては元和3年(1617)に吉原が開設、明暦3年(1657)に浅草付近に移されて新吉原が形成された。また、寛永4年(1627)には大坂に新町もできた。17世紀後半にはこの三都の遊廓にならい、日本全国の都市で次々と遊廓が開設されていく。

江戸時代の社会に生きた遊女の様々な側面やリアリティーを把握するために、比較文化・社会史の視点から、「孝義伝」や古文書、あるいは「遊女評判記」や文学作品まで様々な資料を踏まえ、遊女がどのように見なされ、また扱われたのかを分析したい。

まず、遊女の親孝行の例をあげながら、遊女に対する、権力者と庶民による見方の差異について論じる。続いて、江戸初期の京都遊廓三筋町と島原を中心に、遊女のイメージと実像について論じる。遊女、とりわけ江戸初期から中期の太夫たちは、優雅な美貌と優れた芸当を有する好色のシンボルとして文学・浮世絵などに描かれたが、遊廓という絢爛な世界の中に生きる優美なイメージとともに、貧しい農家から売られ、遊女屋の抱え主から身売りを強制された可哀想なイメージでも捉えられた。本稿ではそのイメージの変化を分析する。その上で、三大遊廓の一つであることから典型的な遊廓と見なされがちな京都の島原遊廓のオリジナリティーを導きたい。

1. 遊女は親孝行なのか

江戸時代には、人身売買は禁止されていたが、貧しい家庭の経済破綻を防ぐ目的で、娘を女郎屋へ長年季の奉公に出すことが認められていた。そしてこうした娘らは、契約に自分の意思で同意することにより、身代金で親を助ける孝行娘として扱われていた。

しかしながら、遊女の身売り奉公の本質を把握すべく、『官刻孝義録』や『本朝孝子伝』や『続編孝義録』をはじめ、江戸後期に盛んに幕府や諸藩により編纂された「孝義伝」という庶民の為した孝行の伝記から、遊廓の遊女の記録を探してみても、その例は非常に少ない。

それは、遊女が孝義伝の孝子の例に該当しないことが理由の一つであると言える。孝行娘として賛美されたのは、家業手伝いや看病等の具体的且つ観察可能な主体的な行為を通じて長年家族を助け、親の世話に尽くしたケースである。遊女は多くの場合幼い時に奉公に出るので、強制されたり、よく分からないまま同意した者も多く、受動的な行為として扱われたと考えられる。さらに遊廓という社会から隔絶された場所から親に尽くしたため、観察可能な親孝行の対象外だったと言える¹。もう一つの理由としては、遊女が公儀にとっては風紀を乱す原因でもあったため、娘を身売り奉公に出すことを奨励する訳にはいかなかったことが考えられる。また、自分の家を助ける一方で長年季の奉公に出た娘は家を出るため、家という秩序の破壊の一因として捉えられたとも言えよう。

一方で、江戸時代前期の庶民文芸作品に於ける遊女の逸話を見ると、民間では彼女たちは孝行娘と見做されていた様子が分かる。

江戸時代、とりわけ前期の人々にとって、遊女は古代・中世の白拍子という一流芸能女の承継者であり、美貌や才能に加え様々な智徳の持ち主であった。例えば、天和元年（1681）に刊行された『名女情比』という仮名草子の巻五には、「遊女情競」なる近世初期の遊女七人の逸話が並べられている。これに比して西鶴を始めとする江戸中期の浮世草子では、過酷な状況の中で孝心に尽くし続ける悲劇的ヒロインとして描写されることが多い。貞享元年（1684）に刊行された西鶴の『諸艶大鑑』の巻四「七墓参りに逢へば昔の」には「そもそもけいせいとなる事、其身いたづらより是にはならず。大かたは親の為ぞかし。」²とあり、同2年（1685）に刊行された『暦』（第二）にも、「おやのためとて色里に、くがい十年とさだめ、かぶろの時はすたる也」³という記述が認められる。そして、江戸後期の戯作の中でも、遊女を孝行娘とする作品が数多く作られた。山東京伝の「九替十年色地獄」（寛政3・1791年刊）では、風俗の風刺の傍ら、貧乏な家に生まれた娘が親孝行のために身売りされた悲哀が描かれている（図1）。作り話の中とはいえ、遊女が孝行のシンボルになったのは、江戸時代の

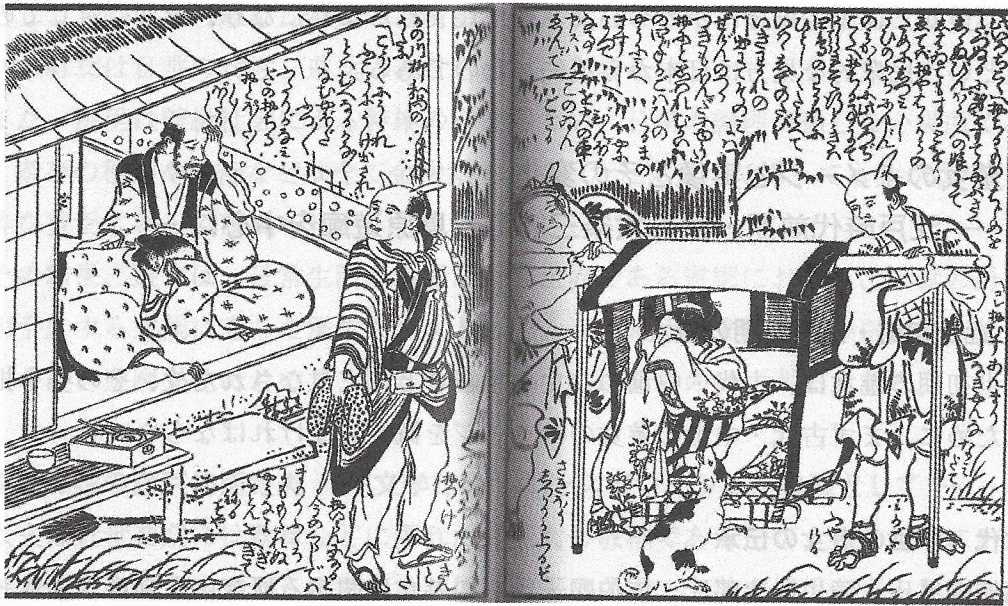


図1「孝行娘が地獄へおちる」

山東京伝「九替十年色地獄」（棚橋正博編『江戸戯作草紙』64-65頁）

人々の遊女に対する考え方を反映していると言える。

また、江戸末期には、実在の遊女を素材にした説話も登場する。例えば、医師で朱子学者である三浦梅園の『梅園拾葉』（安政3・1856年刊）では、下関稲荷町の浅間遊女の父親に対しての孝行が賛美されている。

孝義伝において遊女の例が初出するのは天保期（1830～1844年）である。しかし、称揚の対象になるのは身売り自体ではなく、実家へ戻ってからの親孝行である⁴。

「孝義伝」は、幕府や各藩が民衆教化政策として善行者を表彰するために編纂したものである。この孝義伝に年季明けの遊女の例が載ったのは、政治的混乱や家のあり方の崩壊という状況下、奉公に出たとしても後には実家に戻り親に尽くすべきであるということを、民衆に意識づけるためであったと考えられる。

一方、昔ながらの名妓である遊女と対極にあった売女は、無教養な存在で風俗の乱れの原因とされた。江戸中期から売女の数が増加し、遊女が孝行娘として公儀から認められはじめた時期は、遊女が売女と同一視され社会的に軽蔑されはじめた時期でもあった。こうした矛盾は実に興味深い現象である。

そして、文芸の影響もあって、遊女は、民衆からは、親のために自己を犠牲にした哀れな孝行娘として扱われたのに対し、公儀は遊女に対して曖昧な態度を示すという相反する態度が生じた。

維新を迎え明治5年（1872）に布告された芸娼妓解放令で、強制的な年季奉公が廃止され、欧米の道德の普及の影響もあり、娼妓になるのは自由な選択であるとして、

娼妓（遊女）は卑劣で金にがめつい女として蔑まれるようになり、遊女に対しての孝行娘という民衆的な見方は日本から消失したのである。

2. 遊女のイメージと実像とその変化

— 江戸時代前期・京都六条三筋町と島原遊廓を中心に —

（1）近世初期・江戸前期の遊女

近世初期の遊女は、古代・中世の遊女の承継者として見なされた故、その姿を把握するために、まず古代・中世の遊女のイメージを概観しなければならない。

①古代・中世の遊女の伝承

錦織剛男氏・滝川政次郎氏・佐伯順子氏らの遊女に関する研究によれば、古代・中世の遊女の存在形態は以下のとおりである⁵。

遊女は客を遊ばせるために歌舞を供する芸能者として見られた。性行為は遊びの一部であるが、遊女（あそびめ）・傀儡女・遊興女婦（うかれめ）・遊君・白拍子という呼名から分かるように、単なる売春婦とは違い、芸能の側面の方が強かった。

古代・中世の遊女は、神と深い関わりを持っている。神々を喜ばせるためにこそ歌舞があり、歌舞自体が神がかったものとされた。

遊女は放浪者であり、社会秩序に縛られず自由にさすらいことができ、中世においては、都市をはじめ、門前・港町などの人が多い場所に見られた。彼女たちは、悲惨な生い立ちから、浮世の流れに身を任せるようになった美しい女性として捉えられる。こうした遊女は『万葉集』をはじめとする、古代・中世の文学によく出てくる。

また、古代・中世の遊女は貴族文化との関係も深く、中には、源平の争いなどの騒乱の為に没落した貴族・武士の娘もいたとされている。

②近世初期 理想的なイメージの継承・変化

近世初期においても、遊女は悲惨な事情から苦界に身を落としたというイメージとともに、古典芸能に優れた優雅な美女であるというイメージが継承された。しかし、近世の社会変化の中で、そのイメージは変化していく。

公儀は風紀肅正のため、散在した遊女を都市の一箇所に集めた。天正17年（1589）に日本最初の遊里が二条柳町に開設されたが、二条城・公家屋敷・町屋に近すぎると判断され、慶長7年（1602）に六条三筋町に移動させられた。それゆえに、公儀から遊女は、新しい社会の秩序を阻害する否定的なイメージでも捉えられ、厳しく取り締まられるようになる。

そして、町屋から離れた特定の場所に集められたことで、明確に町女と遊女は区別され、町女は日常の女性、遊女は非日常の女性となる。

また、遊里は階級社会による特権の存在しない、日常の論理が通じない場所であった。遊びの種類や接待などは全て金次第であり、たとえ武士であっても金がなければ、不粹な貧乏人として蔑視された。

その結果、遊女は、日常生活から離れた別世界である遊廓において、上流の男たちを相手にする才能に充ちた優雅な美女として、江戸時代の庶民たちから憧れられた。とりわけ、遊廓文化において、憧れの対象の中心にあるのは、太夫である。

③高嶺の花の江戸初期太夫 — 文学作品のインスピレーションの源として —

太夫は近世初期には歌舞などに優れた芸能女の敬称であったが、いつの間にか遊廓の遊女の最高位を示すようになった。彼女たちは公家・大名を相手にするため、高い教養を身に付け、容姿のみならず、芸道・文学・遊戯などにも秀でた、初期遊廓の貴族的文化の象徴として賛美された。しかし、これは、特権的な高級娼婦として、庶民に憧れを抱かせるために作られたイメージであろう。そして、太夫たちは文学・芸術のインスピレーションの源泉となり、作品を通じて理想像が伝播され、伝説的な太夫を誕生させた。

では、近世初期の文学作品において、太夫はどのように描写されたのか、また、イメージは実像に相応したのか、あるいは、古代・中世のイメージとの変容が見られるのか。太夫・名妓の文学的な肖像を挙げながら、それについて論じたい。

寛永期(1624-44)に成立した、遊里を最初にとりあげた仮名草子『露殿物語』には、露の介という16歳の美少年の目線で、遊廓の太夫や遊びの美学が描かれている。ある日、浅草観音に参籠した帰り道、通りすがりの輿の簾が風で跳ね上がり、乗っていた太夫の姿を見るシーンではこのように記述されている(引用に際し、濁点は筆者が付した。以下同。)

「十六七とうちみえて、さもいつくしき上らうの、したには、しろき御こそで、うへには、しのぶすりの小袖をめし、かいでのやうなる御手にて、こしのかうしをおさへ、さしのぞき給ひし、御かほつき、いふばかりなく、ま事に、ひすいのかんざしは、あだと、たをやかにして、やうりうの、かぜになびくがごとし」⁶

太夫は上品で余りに美しく、まるで天女であるかのように描かれている。この神々しい風景を目撃した露の介の心は奪われ、彼はどうしてもその神がかかる女の世界を知りたいと思い、吉原遊廓へ行く。露の介が訪れた遊廓では、この遊女の最高位たる太

夫は百人の中から選りすぐられた、美貌のみならず、芸能に優れ、最高の智徳を持つ女性の理想として描写されている⁷。

④名妓の伝説

1650年代以降に作成された遊里案内と「色道」の伝授本、遊女評判記の中に当時の名妓の理想像として、近世初期の太夫がクローズアップされる。

例えば、三筋町の二代目吉野太夫の伝説がある。吉野太夫は畿内の浪人の娘で、14歳にして林屋与次兵衛家の太夫となった。彼女は広範な教養、洗練された品格と才能をもち、その名は明国にまで知られていたと言われる。また、その馴染み客の中には後陽成天皇の親王である関白近衛信尋がいたとされる⁸。寛永8年(1631)に26歳で豪商灰屋紹益から身請けされ、その妻になったともいう。

仮名草子に現れるイメージでは、美貌・才能とともに、遊女の道徳が高く評価されている。当時、姫君のように尊敬された名妓は、ある程度、馴染み客を選別することもできて高いプライドを有したが、同時に、忠義心や親孝行をはじめとする様々な美德が求められた。

また、優雅な貴族文化と最も近接したこの時期の太夫は、伝説となり、華やかな町人文化の中心に遊女が置かれた17世紀後半の太夫をしても、このイメージには敵わなかった。

近世初期・江戸初期の遊女は、このように庶民の生活とはかけ離れた世界のものとして、主に文学作品により理想化されて普及したため、確たる実像を知ることは困難である。

(2) 江戸中期の町人文化における遊女

江戸初期には公儀が売春を公式に組織化し、藤本箕山の『色道大鏡』によれば、17世紀後半には島原遊廓をはじめ全国25ヵ所に公許の遊里が形成された⁹。

寛永18年(1641年)に六条三筋町の遊里は、田圃に囲まれた洛外の朱雀野にある土地に移動させられ、正式名を西新屋敷とし、「島原」と称した。

島原・吉原・新町遊廓は、都市の発展や商人の地位の上昇、町人文化の台頭とともに成立した。それまで公家・大名や豪商だけを相手にし、古代からの芸能の承継者として貴族文化の一端も担った神々しい遊女たちは、新たな町人文化の中で、次第に大衆にも身近な存在になっていく。

江戸中期になって遊女は浮世草子の主なテーマになり、遊女評判記が作られ、菱川師宣をはじめとする浮世絵師の美人画が流行する。こうして、名妓の顔も知られ、彼女たちは幕府の統制により日常生活の空間から隔離され、遊廓の中に閉じ込められて

も、近世社会の中で存在感を発揮したのである。

近世初期に形作られた理想的な遊女のイメージは、強い憧れの対象としてさらに深化し、17世紀後半には浮世草子を通じてフィクションの世界に転置されていった。しかし、浮世草子の作者は遊廓経営者とは違って、宣伝の意志もなく、憧れと同時に遊女の実像をも描写し始めたことから、遊女のイメージは具体化し、それにより実像が掴みやすくなっていく。

管見では、遊女はフィクションの世界で描かれることによって初めて、実像をも伴うようになったと考えている。

17世紀半ばには公家・大名の遊廓通いが禁止され、貨幣経済の発展に伴う武家の困窮化と商人の地位の上昇に伴って、遊廓の客層が変わる。17世紀後半には、客の大部分は商人となり、その新たな客の要求に応じて、最高位の太夫の他に、一般町人向けの女郎が増えていく。この最初の大衆化は、イメージと実像に変化をもたらし、太夫・女郎双方のイメージが多様化していく傾向が当時の文学に見てとれる。

公儀によって傾城が廓に閉じ込められたことにより、理想郷たるイメージを強めた一方、遊女の、遊里に身をやつした風紀紊乱をもたらす卑しい奉公人としてのイメージも普及していく。貴族文化の一端を担った遊廓文化の大衆化により、特に吉原はさらに性産業化が進み、17世紀後半から18世紀前半にかけて遊女もますます商品化されていったと考えられる¹⁰。

①江戸初期のイメージの連続

17世紀後半には、新設の島原遊廓を六条三筋町のように上流階級の集う場所にしようとする遊廓経営者の意志がみられる。例えば、明暦元年（1655）に刊行された最初の遊女評判記『嶋原集』のタイトルは「とうげんしゅう」と唐読みをした¹¹。また、前述の通り、天和元年（1681）に刊行された『名女情比』という仮名草子では、日本古来の著名な女性の逸話が「情」を中心に並べられるが、巻五には「遊女情競」として、江戸初期の遊女6名（六条の吉野、八千代、雲井、夕霧、濃紫、島原の吉野）の逸話が並べられている。

このように名妓の理想が過去の遊女に求められたということは、17世紀後半には彼女らに肩を並べる遊女が存在せず、文学作者の中にノスタルジーが抱かれていた証左であろう。天和2年（1682）に刊行された井原西鶴の『好色一代男』の巻五「後には様付てよぶよし野はこんぼんの事」には、二代目吉野について「なき跡まで名を残せし太夫。前代未聞の遊女也。いづれをひとつ、あしきともうすべきところなし。情第一深し」¹²と書かれている。西鶴のこの言葉は、この高尚な遊女に対してのノスタルジーを伝えている。

②イメージの不変と変化 — 江戸中期の名妓 —

17世紀後半には初期の名妓への憧れが作品に現れるが、当時でも優れた名妓がいた。二つの例を挙げながら、17世紀後半の名妓の特徴について論じたい。一つ目は、八千代太夫である。「八千代傳」によれば¹³、播州姫路の浪人の娘で、15歳にして島原奥村屋の太夫になり、大変な才女で音楽や書道に優れたとされている。当時の知識人と一緒に『源氏物語』の講義にも出席し、八千代の紋¹⁴は遠く朝鮮から清にまで知られたと言われている¹⁵。

明暦元年（1655）刊行の『難波物語』などの遊女評判記に八千代伝が掲載されたが、太夫狂いの通人から伝えられた肖像なので、近世初期の太夫と同じように、何が実像で何が虚像なのか、判断しにくい。しかし万治3年（1660）に松江重頼によって編された俳諧撰集『懐子』には八千代の俳諧が載せられており、能書家であったことは確かである。

また、『嶋原集』には、興味深い記述が見られる。

「すこし顔小さきか、また様子そりかへり、体八千代めかず、はし傾城の風あり」¹⁶

江戸初期、特に寛永期の名妓の理想的なイメージを踏襲し、八千代は出自の確かな天才的な遊女として描かれているが、手放しで美貌を賛美されているわけではなかった。

『露殿物語』で描かれた太夫のように、初期には美貌は才能と美德とともに欠かせない基準であったが、17世紀後半の遊女評判記に現れる太夫のイメージでは、美貌が全てではなく忠義・勇気・情・親孝行などという美德が重視された¹⁷。

二つ目の例は、京都生まれ大坂新町扇屋の夕霧太夫である。彼女は死後に伝説となり、正徳2年（1712）に初演された近松門左衛門作の浄瑠璃『夕霧阿波鳴渡』をはじめ、夕霧とその愛人であった豪商藤屋伊左衛門を主人公とする様々な作品の題材となった。井原西鶴の『好色一代男』の巻六「身は火にくばるとも新町夕ぎりが情の事」にも、夕霧は登場する。

「命を捨つるほどになれば、道理を詰めて遠ざかり、名の立ちかかれば了簡してやめさせ、つねれば義理をつめて見ばなし、身おもふ人には世の事を異見し、女房のある男には、うらむべき程を合点させ、魚屋の長兵衛にも手をにぎらせ、八百屋五郎八までも、言葉をよろこばせ」¹⁸

こうした例をみると、江戸中期の名妓が町人文化の中で、当時の文芸作者にとって

のインスピレーションの源になっていたことがよく分かる。また、夕霧は美女で芸能に優れた遊女といった古風なイメージだけでなく、女の情けや恋愛といった心の機微が主なテーマとなり、人間臭いイメージが表されていることも指摘すべきであろう。

③その他の遊女の登場 — 情けの対象・笑いの対象 —

西鶴の作品で見られるように、近世初期から公認の遊廓以外に遊女を抱えることは禁止されていたにも関わらず、17世紀後半には日本全国に多様な形の売春が存在した。

上記の通り、遊廓の大衆化により下々の遊女の数が増加した。元禄期には、島原の329人の遊女の中に太夫は13人いた¹⁹。その他は、天神・鹿恋といった中級の遊女や端女郎・局女郎・北向きという下層の遊女であった。

町人が客層の中心となり、遊廓文化の大衆化が進むと、太夫の上品なイメージの陰に存在していたその他の遊女の姿までもが、浮世草子にも登場するようになる。

『好色一代男』の巻一「たづねてきくほどちぎり伏見しもくまちの事」には、撞木町の伏見遊廓の端女郎の残酷でみすばらしい生活が描かれている。

「よろづ不自由なれば、思はぬ欲もいできて、人をむさぶりて我が身の外の腰張をたのみ、あらしふせぎ候。小野のたき炭、よし野紙、非田院の上ばきまでもみづからして（中略）御幸のまつり、又は五月の五日六日、それぞれの売り日とて、誰さまをさして『その日は』といふほどのたよりもなきに、あらくせがまれて、やうやう日数程ふりて、二とせばかりは暮し候へど、行末の事おそろしく、里はなれにまします親達はいかに世をおくらるぞ」²⁰

西鶴の浮世草子は事実をベースにした「フィクション」なので、その記述には遊廓の仕組みや遊廓に召し使われた下級の遊女の実像が現れていると言えよう。

遊廓では、飲食費から便箋費までの全ての生活費が遊女の負担になり、客がいなかったときには花代が与えられないのみならず、この損は遊女のツケにされていた。ツケの増加や抱え主からの抑圧を避けるために、遊女は客を取ることに専心した。特に揚代が倍になる特別の日であった物日には、必ず客を取らなければならなかった。太夫の豪華な生活とは違い、下級の遊女の生活は困窮しており、卑しい奉公人として扱われていたと言えよう。

遊女は、客を誘惑し信用を得るために様々な手立てを用いた。その中でも心中立ては、17世紀後半からよく使われていた。その方法は、小指の切除が一番信用度が高いとされていたが、そのほかに起請文、放爪、断髪、刺青、貫肉があったと言われている。

もちろん、遊女は基本的に客を愛していないので、心中立ては偽りがほとんどで、

好色の通人をはじめ、野暮でもない限り、客はそれを知っていた。それでも客は好色の遊びの一部として、心中立てを求めたが、特に放爪や小指切除は、一生の傷を残し、体を売れなくなるので、やすやすと求めに応じるわけにはいかない。それ故に偽物が用いられることも多かった。

例えば、『好色一代男』の巻四「形見の水ぐし女郎に爪商の事」には、こういう話がある。

「今ここに美しき女の土葬を掘り返し、黒髪・爪をはなつ」といふ。「何のために」ときけば、「上方の傾城町へ、毎年しのびて売りにまかる」と語りぬ。「求めてこれを何にする」ときけば、「女郎の心中に、髪を切り爪をはなちさきへやらせらるるに、本のはてくだの男につかはし、外の大臣へ」²¹

西鶴の記述をみれば、ずる賢い女郎は自分の髪の毛や爪を情夫に送る一方、他の客には密かに買った偽物を送っていた。その偽りは、批判の対象というよりは、グロテスクであるので、逆に笑いの対象になる。しかし、中には本当の心中立てという自傷を覚悟していた遊女の実像も見える。それでも、西鶴が記述するように、江戸後期には、人を欺く遊女というイメージが一般化し、遊女は信用ならない狡猾な女として蔑視されていく。

④苦しむ遊女

③で見たとおり、遊女の苦しみは17世紀後半の文学作品や随筆などによく出てくる。身を売ること、借金に縛られること、遊廓に閉じ込められること、家族から離れること、恋愛ができないこと、搾取されることなどは、遊女の苦しみ之源であると言えよう。

近世初期から中期の人々にとって、遊女は単なる娼婦ではなく、遊び女、孝行娘、悲劇のヒロインと考えられた。しかし、主な仕事である性を売る辛さも理解されていた。好色の道に長けた遊び人であった柳沢淇園は、享保9年(1724)頃に成立した随筆『独寝』で「床ほどつらきはなし」という言葉を残した²²。

確かに太夫は遊廓の女帝として描写されていることが多いが、実際には華美に飾られただけの身売り奉公人であった。この実像は、西鶴の『好色一代男』の巻六「喰さして袖のたちばなしまばらむかし三笠が事」で描かれている。主人公世之介を好きになり、どうしても諦めたくない島原の三笠太夫が、抱え主に厳しく折檻される。それはフィクションであっても、苦しむ遊女の現実をインスピレーションの源にしたものであり、抱え主に背いた太夫への折檻は、遊里の世界ではあり得ることであったと推測できる。

3. 特殊な遊廓としての島原

公儀によって設立された公娼制度に基づく各遊廓は、設置場所の歴史・特徴や設立経緯などにより性格を異にした。それゆえ、江戸時代の公娼制度の本質や遊女の様々なアリエーを把握するには、各地方の遊廓を比較分析せねばならないと考える。研究の蓄積が潤沢な吉原と比較しながら、私の研究の中核にある島原を分析したいと思う。

(1) 島原遊廓のアイデンティティと文化的レガシー

①都の遊廓

まず、島原の特徴は長い歴史を持つ都たる京に存在することにある。武家の街であった江戸の人々は、街うことと喧嘩を好む人々としてしばしば描写され、商人の街大坂の人々は贅沢を好む欲深い人達の町として描かれた。京は天皇や公家の在す所でもあり、雅とその文化の発祥地であった。都人はそれを大変誇りに思い、島原の遊女が京の遊女であることで付加価値をつけたように、島原遊廓は、伝統や優雅なイメージを守り抜こうとした。都人としてのアイデンティティや誇りが、島原遊廓の制度にも作用し、影響を及ぼした。

②古代・中世の遊女の継承

島原の遊女は中世の貴族相手の遊女である白拍子の継承者として位置付けられた。実際、江戸初期の島原の太夫は白拍子を模し、それは時とともに徐々に変化した、島原遊女が中世の系図を引く高尚な遊女であるというイメージが保たれた。

③貴族文化・優れた名妓の六条三筋町

江戸における最初の遊廓は元和3年(1617)に設立された元吉原であるが、京都での最初の遊廓は天正17年(1589)に公許された二条柳町である。この遊郭は慶長7年(1602)に東本願寺の北、六条三筋に移転を命じられる。これが江戸時代最古の公認遊廓であるが、当時は公娼制度が確定しておらず、前述のとおり、中世のように公家や大名も三筋町に出入りしていたと言われている。こうした話は伝承に過ぎないが、後水尾天皇の「若公家之御法度」(寛永8年・1631)において、公家衆の廓通いが禁止されたことは、江戸初期の三筋町に公家が頻繁に出入りしていた証であろう²³。

この三筋町から、のちの島原につながる太夫像が生まれている²⁴。江戸初期の遊廓文化の代表は遊女最高位の太夫であった。遊女における太夫の敬称は江戸初期に誕生したが、本来は五位の朝臣の通称であり、主に儀式や神事、芸能関係をつかさどる人

を指した。それゆえ遊廓の太夫は売女扱いよりも、当代きっての優秀な芸能者として扱われた。こうした最高位のそういう遊女に対して抱え主が敬語で話していたとも言われており、町売りに行く際には籠にも乗り、公家屋敷に向かう時には、姫君のように扱われたと言われる²⁵。

そして、六条三筋町時代は、後の遊廓のように堀の中に閉じ込められておらず、三筋町の遊女は自由に遊廓を出ることが出来たという²⁶。

④三筋町の影響

遊廓では、その後、社会秩序の保全のため、遊女は廓に閉じ込められるようになった。そして、遊女を白拍子的な芸能者からただの卑しい奉公人と位置付けるべく、都の遊女の特権は否定され、遊廓は京の中心から洛外へと移動させられた。

とはいうものの、島原の遊女は、厳しく束縛された吉原の遊女と比べると、自由であったと言われる²⁷。島原では、遊廓の戸口を守る番人に心付けを与えれば、外出できたと言う²⁸。

また、平安時代からの文化的なレガシーや近世初期の名妓の特権やイメージの一切を排除することは難しく、三筋町遊廓の影響は残り続けた。これは、新設される他の地域の遊廓と比して、三筋町の伝統・アイデンティティを名妓の伝説とともに、全国に誇示し売り込みたいという島原の主人たちの意思でもあったと言える。

島原遊廓の太夫は最も優雅で美しいという評判は全国に轟き、実際にそうであったかは別として、有名な吉原の高雄、薄雲が元々京女であったということもあり²⁹「京の女郎に長崎の衣裳を着せ、江戸の張りを持たせ、大阪の揚屋に遊びたし」³⁰と描写されているように、島原太夫への格別の江戸時代の人々の眼差しが見られる。

(2) 遊女の出身地と身分

江戸時代の売春についての先行研究の多くは、売春の性産業化が進んだ江戸後期の史料に基づき、吉原または非公認の売春に集中する傾向が見られる。

遊女は、生活に困窮した越後、越中、越前、出羽など北国の百姓家の娘が安価で身売りされ、性産業に搾取され、故郷へ二度と戻れない可哀想な娘として描写される³¹。これは確かに江戸後期の多数の遊女に当てはまったことは否定できないが、江戸時代全般にわたり、果たして全ての遊女が皆遠い国の貧乏百姓の娘であったのだろうか。

遊里を30年にわたって歩き集めた資料をもとに、延宝6年(1678)藤本箕山が書き上げた『色道大鏡』という遊里案内書や、島原の置屋・茶屋である輪違屋の史料から、島原遊廓の遊女の出身地と身分について調べたい。

①島原遊女（太夫・天神）の出身地をめぐって

島原の由来と廓のアイデンティティは抱える遊女の選択にも影響を及ぼしたと思われる。

前述のとおり、江戸時代の京都は雅な貴族文化と伝統の息づく都市であり、京女は美しくて上品な女性として見なされていた。京女の風流なイメージを活かすために、島原の傾城屋の抱え主は、遠国の安い女より、京都または上方に生まれ育った女を優先的に探す傾向があったと思われる。

その理由に関して、『日本遊里史』で上村氏は「就中京都の出を歓迎した、利發者は何處の山の奥からでも出て来るけれども、心の奥に風流のひそみがあるのは常時京都の出の他に無かつたからである」と言っている³²。

また、吉原と島原では遊女が話す言葉が違い、そこから遊女の出身地を推定することができる。吉原には様々な地域から来た遊女がいたので、客と分かり合えるようになるために、「ありんす言葉」という遊里言語が使われていた。しかし、島原の「なます言葉」は上方方言に近い言語だったようである。堀江氏によると「恐らく、関東と関西とでは遊女志願者の出身地方が異なり、基本的に関西の遊郭に流れてくる少女は、大枠で関西弁のイントネーション圏内の出身者が多いのに対し、関東では江戸弁とはかなりイントネーションが異なる東北地方からやってくる少女が圧倒的に多かったという背景が考えられます」³³と述べている。

このように、島原の遊女の大部分は京女または上方に生まれ育った女であったとされている³⁴。では、その実情がどうだったのか、『色道大鏡』で検証してみたい。

藤本箕山の『色道大鏡』には、島原の12人の名妓の情報が記されている。表1はこれに基づいた遊女の出自の一覧である。

(表1) 正保～寛文期の島原の名妓12人
(藤本箕山『色道大鏡』612-620頁のデータに基づき作成)

1	一世左門(賢子)喜多八左衛門家	奈良生まれ	京都五条の商家に嫁す
2	一世小藤(鳳子)中村又十郎家(柏屋)	京都生まれ	退廓
3	八千代(尊子)奥村三四郎家	播州姫路生まれ	退廓
4	二世初音(夭子)上林(杉山)五良右衛門家	江州永原生まれ	退廓せず死亡
5	一世藤江(貴子)伊藤吉右衛門家(柏屋)	姓賤しからず	退廓
6	葛城(雲子)伊藤吉右衛門家(柏屋)	京都生まれ	年季を明けず死亡(早世)
7	一世初音(周子)宮嶋甚三郎家	京都生まれ	退廓
8	二世和泉(清子)宮嶋甚三郎家	京都生まれ	退廓
9	一世金太夫(麗子)上林(杉山)五良右衛門	京都生まれ	退去
10	一世薫(美子)上林(杉山)五良右衛門	城州伏見生まれ	年季を明けず死亡(早世)
11	二世薫(陰子)上林(杉山)五良右衛門		
12	三世薫(暉子)	京都生まれ	退廓

この12人の名妓の中で7人は京都生まれである。そして、出身地未詳の2人を除く3人は奈良・姫路・江州永原（近江国）生まれとわかる。これに限って言えば、京都出身の遊女が非常に多かったと言える。

しかし、それは名妓というエリートに関してのみの情報である。その他の島原遊女は必ずしも京都や畿内の出身であったのかという疑問がある。

藤本箕山が記した、最高位が太夫・天神の正保期（1644-1647）から延宝期（1673-1680）までの島原の遊女約400人の記述から情報を抽出・整理できる³⁵。出身地は明確には書かれていないものの、島原遊女になる前後の情報が記載されており、出身地が推測できると考えられる。出身地についての手がかりとなり得る情報が記載された遊女（上記の名妓を除く）を抜粋してリストアップし、以下の表を作成した（表2）。

（表2）正保～延宝期の島原の太夫・天神58人
（藤本箕山『色道大鏡』521-607頁のデータに基づき作成）

	遊女名と諱・位・抱主家	島原に来る前	年季明けの後
1	八橋(哲子)太夫(喜多家)	大坂にて禿	
2	一世三笠(陶子)太夫(喜多家)		北国に赴く
3	三世長嶋(真子)太夫(喜多家)		北国に赴き越前にて病死
4	大和(瑛子)太夫(喜多家)	大坂西村仁左衛門の遊女	
5	四世長嶋(枯子)太夫(喜多家)		身寄りなく餓死
6	二世吉野(雪子)太夫(喜多家)	大坂木村又二郎の遊女	
7	一世上總(善子)太夫(喜多家)	大坂木村又二郎の遊女	
8	一世野州(聰子)太夫(喜多家)		退出 奥州秋田にて死去
9	吉崎(濱子)太夫(喜多家)	元々大坂一夢の遊女だった	
10	二世三笠(祥子)天神(喜多家)		島原に住む
11	一世葛城(騰子)太夫(上林家)		西国に住す
12	一世夕霧(増子)太夫(上林家)		二世高雄と同時に北国に赴く
13	二世高雄(郢子)天神(上林家)		一世夕霧と同時に北国に赴く
14	一世衣重(朗子)太夫(伊藤家)		北国に赴く
15	二世藤江(謙子)太夫(伊藤家)		年季を明けずに故郷に帰る
16	染川(涉子)太夫(伊藤家)		北国に赴く
17	越中(寵子)太夫(伊藤家)	大坂西村仁左衛門の遊女	大坂へ帰る
18	琴(留子)天神(伊藤家)		尼になり、同家にいる
19	軒端(謀子)天神(伊藤家)	元大坂の遊女松風	
20	越後(零子)天神(伊藤家)	元大坂の遊女外記	
21	定家(永子)太夫(高田家)		尼になって、同家にいる
22	一世嶋助(副子)天神(高田家)		北国に赴く
23	花月(景子)天神(高田家)		島原に住む
24	大和(抛子)天神(高田家)	長崎にて禿	
25	初嶋(浦子)天神(高田家)	元大坂松原屋の遊女	

26	小藤(短子)太夫(宮嶋家)	元大坂西村長左衛門の遊女	
27	二世大橋(嬌子)太夫(梅村家)	元大坂金田屋の遊女	
28	二世淡路(紂子)天神(梅村家)	元大坂吉原清兵衛の遊女	
29	白藤(祐子)天神(井筒屋家)	元大坂の遊女唐松	島原に住む
30	花崎(仇子)天神(井筒屋家)	大坂にて禿	
31	玉井(姦子)天神(井筒屋家)	元江州大津多賀源二郎の遊女	
32	吉野(征子)太夫(田中家)		島原に住む
33	對馬(保子)天神(田中家)		抱主田中喜三郎に嫁す
34	舩朝(脩子)天神(田中家)		江州大津に住む
35	和州(屈子)太夫(吉田家)	元大坂木村又二郎の遊女	
36	吉崎(助子)天神(吉田家)	元大坂 理兵衛の遊女	
37	和泉(沛子)天神(吉田家)	元大坂中村十左衛門の遊女	
38	二世志賀(暫子)天神(吉田家)	元大坂 理兵衛の遊女	大坂へ帰る
39	薄雲(剛子)天神(中村藤右衛門家)		京都に住む
40	一世金山(幸子)太夫(中村又十郎家)		北国に赴く
41	高松(相子)天神(中村又十郎家)		島原に住む
42	生野(丹子)天神(中村又十郎家)		同家にいる
43	藤江(貢子)天神(中村又十郎家)	元大坂木村家の遊女	
44	初藤(温子)天神(林家)		抱主徳長徳左衛門に嫁す
45	三夕(佳子)天神(林家)		抱主林与次兵衛に嫁す
46	一世花崎(仇子)太夫(北川家)		京都に嫁ぐ
47	桂(槁子)天神(北川家)		伏見遊廓久兵衛に嫁す
48	常盤(寵子)太夫(奥村家)		抱主奥村三四郎に嫁す
49	藻塩(轉子)太夫(奥村家)		信濃に住む
50	小太夫(野子)太夫(奥村家)	元傳法町(大坂)の市左衛門の遊女	抱主林四郎兵衛に嫁す
51	一世高橋(鸞子)太夫(杉村家)	大坂の遊女	
52	八塩(澗子)太夫(杉村家)	元大坂野間市兵衛の遊女	
53	衣川(涌子)天神(杉村家)	大坂にて禿	
54	一世高瀬(奥子)天神(杉村家)	大坂にて禿から遊女に	
55	一世瀧川(載子)天神(杉村家)	元城州伏見の遊女	
56	一世三笠(累子)天神(杉村家)	大坂にて禿から遊女に	
57	一世葛城(謝子)天神(杉村家)	元々江州大津の遊女	
58	夜津野(瑛子)天神(杉村家)		大坂へ帰る

このデータからいくつかの仮説が立てられる。

58人のうち26人は、元々大坂にいた禿や遊女であった。また、大津の遊女であったものが2人、長崎の禿であったのが1人いた。彼女たちは京の出身ではなかった可能性が高い。女郎のエリートである名妓と異なり、太夫・天神の多くは京都生まれでなかったものと思われる。

また、年季明けの情報を吟味すると、江戸前期の島原の太夫・天神の出自は更に多様であったと推測できる。「北国に赴く」という記載が8つあり、「奥州秋田にて死去」

「西国に住す」「信濃に住む」という記載もある。すなわち、この遊女58人のうち11人は年季明けに上方以外の国へ行くことがわかる。身請けされた遊女もいたと思われるが、年季明けに故郷に帰ったとも推測できる。これについて三つの理由が考えられる。

第一に、年季明けの行先が記載されている場合、大部分は北国である。身請けする大尽は必ずしも北国の人ばかりではない筈で、行先の記載が身請けなら、他の地名が出てくる筈と考えられる。

第二に、前述の通り、島原では京都出身の子が歓迎されたといえども、越後などをはじめとする北国から安値で売られた貧民の遊女は日本中に広く存在したため、島原にもいた筈である。遠国から売られた子は、幼いうちから禿や養女として京の風流な風に当てられ、京女として紹介されたものもいたかもしれない。江戸時代、遊女奉公を出すという目的で女子を養子にすることは禁止されていたが、実際にはこうしたことは広く行われ、時には女衞や抱え主自身が娘を一生不通養子娘にしたと言われる³⁶。このように女子の人身売買は密かに行われていたので、京言葉を話す島原太夫のイメージに相応しい太夫の実の生まれが北国であったことは十分にあり得る。

第三に、江戸初期の高位の遊女は後期のそれに比べて容易に儲け、身売りの金を返済し、早く退出ができたと言われている³⁷。幕府は寛永2年(1625)から元禄11年(1698)の間、奉公人の年季を10年と定めていた。この年季の制限は年季明け後に奉公人が実家に帰ることを促進するものであり³⁸、遊女に関しても同様であったと思われる。奉公に出て、10年後故郷に戻って、結婚するのがおそらく理想だったわけで、良く売れた娘はそれができたものと思われる。表2で見られるように、年季が終わってから、尼になった者や、引き続き遊廓に住んだ者も結構いたが、戻るべき実家があった遊女は、年季後に故郷への帰還を願ったことであろう。

以上のように、江戸前期の島原の太夫や天神の出身地は、必ずしも京都や上方に限らず、北国や西国など多様であったと考えられる。

② 島原遊廓の遊女の身分の調査をめぐって

島原の太夫には、武士の娘がふさわしかったと言われている³⁹。しかし、遊廓の洗練された華やかなイメージの裏で、遊女は身売り奉公人として苦しい生活をしていた。また、実の娘をこの苦界に出すのは、生活に困窮した親であった。それ故、武士の娘だったとしても、その実態は困窮した下級の武士や浪人の娘であったと言えよう。

(表1)に記したように、藤江太夫には「姓賤しからず」という記載があり、身分が低くない家の娘だったとみられる。江戸前期の史料なので、遊女屋に娘を売らざるを得ない貧しい武士は、基本的に浪人であった。江戸時代を通じて大名家の改易は170件程あったが、多くは江戸前期である。この頃、社会には浪人が溢れており、遊

女奉公の前払いは普通の奉公よりも非常に高額であったため、これを目当てに困窮した浪人の家が急場を凌いだと思われる。

『色道大鏡』では、優れた名妓が多数存在した三筋町・島原の初期の太夫の出自がわかる⁴⁰。もちろん名妓の伝承による情報なので信憑性が必ずしも高いとは言えないが、例えば、二代目吉野太夫は浪人になった武士の娘で、和泉太夫は藤原氏の公家の子孫であったという。

そして、京都最初の遊里であった二条柳町の創立者の原三郎右衛門と林又一郎は秀吉の旧家臣であったと言われている⁴¹。それ故、江戸前期には、多くの浪人が生き残るためのセーフティネットとしても遊廓は機能したと考えられる。

③江戸後期・明治初期：百姓や京都町人の娘がいた証

『色道大鏡』をはじめ、一般的な書物としての遊女評判記を用いることで、江戸前期の女郎の最上位の太夫と天神についての情報を得、分析することができる。しかし、中位以下の鹿恋や端、北向に関する情報は皆無に等しく、推測するより他ない。

身寄りや家柄の確かなよく躰けられた武家の娘は、京や上方の百姓町人の娘に比べて契約が高くついたが、一方で、金のない客向けの下位の女郎たちの出自に関しては、遊廓の抱え主は比較的鷹揚であったと思われる。鹿恋などは男たちの同情を誘う悲惨な身上を売り物にしていた。

京都の町人の娘がいた証としては、江戸後期ではあるが法的史料に出てくる、町人扇屋徳兵衛の娘で島原遊女のうのの身売り証文があげられる。

「一 私実娘うのと申、当年拾才相成候者、当子十月ゝ来ル已十月迄、丸拾七年限り、給金壹両貳分相究、不残証文之上ニ而慥ニ請取、其元殿へ傾城奉公ニ進し申候処実正也、此給金之外一切無心ヶ間敷義申間敷候、右年季之儀は、先年従御公儀様蒙御赦免、相對ヲ以相究候上ハ、年季之内何角妨申義仕間敷候、宗旨は代々東本願寺宗紛無御座候、御入用之節は寺請状何時ニ而も差出可申候、若此者取逃・欠落いたし候は早速尋出、欠落之雜物不残相弁、本人共急度手渡可致候、欠落之日限致延引候ハ、年季之末相延、定之通為致奉公可申候、猶亦引負・借金等有之候ハ、年季明之節、所之作法通り相済せ召連歸り申候、此判形之外、親類・縁者・言名附之夫杯と申掛、違乱妨申者無之候、此うの年季之内、身請仕候仁有之ハ、其礼金如何程成共御取被成、何国何方へ成共、年季之外末々迄も御遣し可被成候、若年季之内不奉公致候歟、又は御勝手ニ寄、銀子御入用之儀有之候ハ、右うの私共世話いたし奉公ニ遣し替、其給金如何程ニ而も身請金として不残無滞其元殿へ相渡可申候、且又年季之内、立銀杯申無躰之暇申請間敷候、

万一不慮ニ相果候歟、亦是病死及懷妊・安産難叶相果候ハ、互之為損申分無之候、若年季明候節、証文印形之者相果候而行衛難知候ハ、親類之者尋被下、娘義渡可被下候、親類迄も難相知候ハ、親類之者外似合敷縁辺之節有之候迄、下女成共被成置被下候而、相応之方附有之候迄、何方へ成共有附遣し可被下候、年季之内勝手ニ寄一家方之内御預ヶ被成候歟、又は住替被成候共、此証文ヲ以相究候年季之内一列証文致替申候、不及右極メ之通り奉公相勤させ可申候、為後日之傾城奉公人請状依而如件、

文化十三年

(諏訪)

すハ町五条上ル

子十月

扇屋徳兵衛家代

請人 江戸 木津屋 忠七 印

同家実母 頼時 頼時 頼とめ 印

奉公人 口入 吉野屋倉右衛門 印

大坂屋庄兵衛殿」⁴²

また、京都市歴史資料館所蔵の輪違屋文書には幕末維新期の身売り証文が含まれており、その一部からは、遊女の出自がわかる。

京都府知事長谷信篤殿

遊女稼御願

城州紀伊郡東九条村

百姓

山本藤五良姪

はま

申十六歳

私義今度下京第十六区西新屋敷於兼て

御免許之場所江遊女出稼仕度尤御規則通

可相守候間御差許之上鑑礼御下渡被下候様

奉願候以上

(明治五年)

壬申十一月

右本人はま

右之通当人志願ニ相違無御座候間御許容

被下度奉願候以上

人主右本人伯父

百姓藤五良

下京第十六区中之町
引請人高橋与兵衛
城州紀伊郡東九条村
戸長沢井弥兵衛
下京第十六区
西新屋敷中之町
戸長高橋勝七⁴³
遊女稼御願
下京第九区塩屋町
髪結職錦織藤助女子
ゆき
申廿八歳
私儀今度下京第十六区西新屋敷兼而
御免許之場所江遊女出稼仕度尤御規則通
可相守候間御差許之上鑑礼御下渡被下候様
奉願候已上
(明治五年)
壬申十一月
右本人 ゆき
右之通当人志願ニ相違無御座候間御許容
奉願候已上
右本人実父錦織藤助
下京第拾六区中之町
引請人高橋与兵衛
下京第九区
塩屋町
戸長西村利三郎
下京第十六区
西新屋敷中之町
戸長高橋勝七⁴⁴

業のものである。

島原の特性に関して、遊女の出自と地理的な要因を分析したが、次節ではさらに島原が18世紀から直面した経営難にどのような戦略で乗り越えようとし、それがどのような変化をもたらしたのか検証したい。

(3) 島原の個性的な戦略と変化

滝川政次郎氏は近世の公娼制度の歴史を二期に分けている。一期目は遊廓全盛時代である豊臣政権から享保期（1716-1736）まで、二期目は衰微の時代である享保期から幕末までである⁴⁵。二期目には、利便性の高い立地にあつて安価な非公認遊里が盛んになり、遊廓の客はますます減り、公認遊所一か所体制が崩壊する。そのため、この公娼制度を取り戻すべく、様々な改革が戦略的に行われた。

特殊な性質を持った島原は、公娼制度の危機に対して独特な反応を見せている。島原遊廓が如何にしてその日本最古の廓の伝統を背景に優位を守ろうとしたのか、吉原と比較しながら言及したい。

先行研究で一般的に主張されているのは、中世や江戸の初期のように芸能者としての側面が強かった遊女たちが、次第にその性質を捨て、単なる娼婦へと化していったということである⁴⁶。そうして、遊女に対する眼差しに変化が表われた。江戸後期の幕法や武陽隠士の随筆『世事見聞録』では、江戸前期に存在しなかった「売女」という言葉が見られる。これは、優れた芸人という意味を含む「遊女」という公娼の女郎を指す言葉に代わり、非公認の単なる娼婦の一般化を示した言葉である。

元禄期の豪商たちの衰微や享保期の不景気の影響によって、太夫と遊べる程の豊かで教養ある大尽が減少し、吉原遊廓などは、低価格へと舵を切り、下級武士や一般庶民の教養と予算に見合うサービスを主に提供するようになり、大衆化していく。非公認売春対策として、寛文6年（1666）に江戸では湯女の風呂屋が禁止され、湯女は吉原に送られた。吉原の積極的な戦略は、私娼を吸収し、吉原の低級遊女として取り込むことであつた。こうして吉原は18世紀前半から大衆化を進めた。

一方、島原は個性的な反応を示した。島原の衰微の原因は都心から離れた洛外の立地と、遊女の高い値段と相俟って、江戸初期に発せられた貴人・大名の通い禁令や豪商の衰微による大尽客の減少と、18世紀前半から京都の中心に発展した祇園・北野上七軒・宮川町などの花街の繁栄にあると考えられた。島原は、高級なイメージを守ろうとし、客が少なくなったことに対応して端女郎などの下級女郎の人数を減らし、全国から遊客を引き寄せるために、太夫の人数を増やしたのである。それ故、18世紀半ばには、吉原では性産業化が進んだのに対し、島原は文化人向けの小さい遊廓へと姿を変えた。このため、江戸初期に公家の集まる場所であつた島原は、18世紀後半には

文人が集まるサロンへと変貌を遂げた⁴⁷。

吉原と島原の異なる変遷は、吉原では宝暦11年（1761）に、太夫が消滅し、売春の性格が強い遊女である花魁が最高級の遊女になったことで明確となる⁴⁸。上述のとおり、島原では太夫は維持され人数も増強された。島原の太夫は実に、寛政元年（1789）時点で遊女119人中38人を数え、三分の一を占めた⁴⁹。しかし、それでも、島原も享保期には大衆化の波を多少受け入れざるを得なかったと言わねばならない。顧客の獲得のため、享保10年（1725）には夜店が許され、さらに遊廓に通いやすくすべく同17年（1732）には西口が開設されて、踊り場が作られ、一般の女性も島原へ入ることが出来るようになった⁵⁰。

ただし、同時に京の花街の発展も進んだ。この流れは止められず、18世紀後半には客足を奪われた島原はますます衰微した。大衆化を拒む島原は、文人のサロンと化した、文人は全盛期の貴人や豪商の客と比べて人数も少なく浪費もしないので、収入が激減したのである。

このため、18世紀後半に、島原は幕府とともに祇園等の花街の影響を削ごうと試みる。明和7年（1770）には京都町奉行による花街の手入れが行われ、花街の売女は島原へ送られた（島原流し）⁵¹。また、寛政2年（1790）にも寛政の改革の一環として島原流しが行われた⁵²。二度目の島原流しでは、却って島原の遊女の数の供給が需要を大幅に超え、島原に経営難をもたらした。そして、この問題を解決するために公娼の遊廓が増やされる。寛政2年（1790）には、祇園新地・北野新地・二条新地・七条新地の四花街が公許され、芸子とは別に、隠し売女の一部が公認の女郎になった。その結果、花街は一層栄え、島原の衰微に拍車がかかったのである。時代は少し下るが、享和3年（1803）に発行された滝沢馬琴の『羈旅漫録』には「島原の郭今ハ大におとろへて曲輪の土屏なども壊れ倒れ揚屋町の外ハ家もちまたも甚だきたなし」⁵³とある。他方、島原は、宝暦11年（1761）に都の全茶屋が洛中洛外茶屋総年寄たる島原へ茶屋株料を納め、島原の指図を受けることになったため、京の遊里の元締めとしての地位を確立している⁵⁴。また、寛政2年（1790）には、奴婢として花街から島原へ送られた遊女中、160人が花街4ヵ所に分散して遊女として配属され、その茶屋は遊女屋としての営業ができるようになった。そして、その女郎たちは島原からの出向の形態をとり、抱え主は島原の傾城屋であった⁵⁵。

こうして島原は京都の花街を遠隔で経営する元締めとなったため、『京都府下由緒』によると幕末期には島原は16ヵ所の花街を支配していた⁵⁶。この出稼ぎという支配制度で、島原は京都唯一の公認の遊廓として明治まで営業し続けることができたと言える。

むすび

江戸時代の社会の特性や変化と関連させつつ、江戸の人々の遊女に対する眼差しや、遊女のイメージと文芸作品に浮かび上がる実像、および三大遊廓の一つであった京都島原の特徴について試論した。

江戸時代の遊女は、社会の日常生活から離れた遊廓に閉じ込められてはいても、マージナルな存在である奉公人として、また公儀に取り締まれ批判を受けたり同時に賛辞もされる対象として、さらには文学作品のインスピレーションの源として、江戸の社会に存在感を示していたと言えよう。

そして、遊女に対する見方とその変化は、江戸時代の社会の変化や矛盾を反映している。

近世初期の遊女は、高級客を惹きつけるべく太夫を雅の文化の表象にしようとする遊廓経営者の思いや、遊廓の洗練された遊びに熱中する通人の幻想によって生み出された、古風で理想的な女性のイメージであった。しかし、それは現実とはいささかかけ離れたイメージであったと推測できる。こうした遊女像には理想的な側面が強く、下級遊女はほとんど描写されていない。

人々の憧れの対象になっていた、太夫をその頂点とする傾城とも呼ばれた遊廓に閉じ込められる美しい遊女は、17世紀半ばには、新しい町人文化の表舞台に躍り出る。遊廓が町人にとっても身近な存在となるにつれ、大衆向けの文芸作品においては、中級・下級の遊女も描写されるようになり、以前からあった孝行娘、賢明で上品で徳高いという肯定的イメージの傍ら、残忍な抱え主から搾取されている可哀想な存在、あるいは偽心中を平気でするずる賢い女という生々しいイメージも普遍化していく。こうした経緯を経て、単に高尚で優雅なイメージをもたれていた遊女像は、次第に多様化し、変化して、以前より人間らしいイメージになっていったと言えよう。

17世紀後半の文学作品や随筆などに見られるように、遊女は身代金と化した前借金を返済するために身売りを強制され、遊廓は様々な客の好みに合わせるため多様な遊びを提供するようになり、性産業として発展していく。

また、非公認の売春の発展や奢侈文化の衰退に伴い、遊女は傾城町の美女から悪所の女へと蔑視され始め、18世紀半ばからは単なる売婦である売女として見られるようになっていく。ただし、遊女のイメージや実像が江戸時代後半に悪化していくことは確かであるとはいえ、これを絶対視することはできない。江戸時代後期には確かに悪化したが、その後も伝統的なイメージは残存していた。

例えば、京都の島原では、大衆化の傾向も見られたものの、吉原と違って「太夫」の敬称は消えることがなく、逆に太夫の人数が増えていったという状況が確認される。

また、都の優雅な遊廓のイメージを守るために、遠国出身の女性ばかりではなく、京都・上方で生まれたか、もしくは京の遊廓の礼儀・作法を身につけた遊女として付加価値をつけて売り続けたことも事実である。

明治維新まで、古典芸能に通じる優雅な太夫イメージが依然として残り、今日でも芸事に秀でた存在としての太夫のイメージが存在することはその証左であろう。本論文では、京都の島原遊廓を中心に比較文化・社会史の視点から分析を試みた。遊女のイメージと実像は、時と場所により異なり、社会を反映して変化を遂げたことを指摘して筆を置きたい。

参考文献

- 井原西鶴「暦」(正宗敦夫編『西鶴全集 第9巻 暦』日本古典全集刊行会、1935)
 井原西鶴「諸艶大鑑〈好色二代男〉」(『決定版 対訳西鶴全集 2』明治書院、1992)
 井原西鶴『好色一代男』(岩波文庫 黄204-1) 岩波書店、2011 (1955年初版)
 今西一『遊女の社会史 島原・吉原の歴史から植民地「公娼」制まで』有志舎、2007
 上村行彰『日本遊里史』(日本文化史叢書) 藤森書店、1982
 小野晋編『近世初期遊女評判記集 本文編』(近世文藝資料9) 古典文庫、1965
 小野武雄『吉原と島原』(講談社学術文庫1559) 講談社、2002
 『官刻孝義録』東京堂出版、1999
 喜田川守貞『近世風俗志—守貞謄稿(3)』(岩波文庫 黄(30)-267-3) 岩波文庫、1999
 「京都府下遊廓由緒」(新撰京都叢書刊行会編『新撰京都叢書 第9巻』臨川書店、1986)
 佐伯順子『遊女の文化史』(中公新書853) 中央公論社、1987
 佐賀朝、吉田伸之編『三都と地方都市 シリーズ遊廓社会 1』吉川弘文館、2013
 下重清『“身売り”の日本史—人身売買から年季奉公へ』吉川弘文館、2012
 山東京伝『九替十年色地獄』(棚橋正博編『江戸戯作草子』小学館、2000)
 『人倫訓蒙図彙』(東洋文庫, 519) 平凡社、1990
 Stanley Amy, *Selling Women: Prostitution, Markets, and the Household in Early Modern Japan*, University of California Press, 2012
 『続編孝義録料』汲古書院、2017
 曾根ひろみ『娼婦と近世社会』吉川弘文館、2003
 高橋利樹『京の花街「輪違屋」物語』(PHP新書477) PHP研究所、2007
 滝川政次郎『遊女の歴史』(日本歴史新書) 至文堂、1983 (1965年初版)
 滝沢馬琴『壬戌羈旅漫録』畏三堂、1886
 塚田孝『大坂 民衆の近世史 老いと病・生業・下層社会』(ちくま新書1294) 筑摩書房、2017
 Teruoka Yasutaka, “The pleasure quarters and Tokugawa culture”, in Gerstle C. (ed.), *18th Century Japan*, Routledge, 1989
 「嶋原集」(小野晋『近世初期遊女評判記集 本文編』(近世文藝資料9) 古典文庫、1965)
 「難波物語」(中村幸彦編、日野竜夫編『遊女評判記・花街本』(新編稀書複製會叢書 第25巻) 臨川書店、1990)
 錦織剛男『遊女と街娼 京都を中心とした売春史』圭文館、1964
 東明雅校『露殿物語』古典文庫71、1953
 藤本箕山『色道大鏡』八木書店(新版)、2006
 武陽隠士『世事見聞録』(岩波文庫(青) 48-1) 岩波書店、1994
 堀江宏樹『三大遊郭 江戸吉原・京都島原・大阪新町』幻冬舎、2015
 「本朝孝子伝」(中野幸一編『奈良絵本絵巻集 別巻1』早稲田大学出版部、1988)
 牧英正『近世日本の人身売買の系譜』創文社、1970

牧英正『人身売買』（岩波新書 青版-801）岩波書店、1971
三浦梅園「梅園拾葉」（日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成 第2期 5』吉川弘文館、1974）
宮本由紀子「遊里の成立と大衆化」（竹内誠編『日本の近世（14）文化の大衆化』中央公論社、1993）
『名女情比』（愛媛大学古典叢刊2）愛媛大学古典叢刊刊行会、1970
柳沢淇園『独寝』近世庶民文化研究所、1957
渡辺憲司『江戸遊女紀聞 売女とは呼ばせない』（ゆまに学芸選書 Ulula 8）ゆまに書房、2013
渡会恵介『京の花街』大陸書房、1977
「輪違屋文書」（京都市歴史資料館写真版）

- 1 塚田孝『大坂 民衆の近世史』を参照。
- 2 井原西鶴「諸艶大鑑〈好色二代男〉」、161頁。
- 3 井原西鶴「暦」、7頁。
- 4 前掲塚田を参照。
- 5 錦織剛男『遊女と街娼 京都を中心とした売春史』、滝川政次郎『遊女の歴史』、佐伯順子『遊女の文化史』を参照。
- 6 東明雅校『露殿物語』、8頁。
- 7 前掲東、同頁。
- 8 小野武雄『吉原と島原』、187頁。
- 9 藤本箕山『色道大鏡』、341-344頁。
- 10 遊廓が大衆化し、遊女が商品化していくという傾向は否定できないが、筆者は遊廓によって大衆化や商品化の程度が異なると考える。
- 11 今西一『遊女の社会史 島原・吉原の歴史から植民地「公娼」制まで』、80頁。
- 12 井原西鶴『好色一代男』、129頁。
- 13 前掲藤本、614-615頁。
- 14 上級の遊女は抱え主から与えられた定紋をもっていた。
- 15 前掲藤本、615頁。
- 16 「嶋原集」、93頁。
- 17 渡辺憲司「太夫の周辺 都会の遊女たち」（渡辺憲司『江戸遊女紀聞 売女とは呼ばせない』、69-154頁）。
- 18 前掲井原『好色一代男』、162頁。
- 19 Teruoka Yasutaka, "The pleasure quarters and Tokugawa culture", in Gerstle C. Andrew (ed.), *18th Century Japan, Culture and Society*, p.8.
- 20 前掲井原『好色一代男』、33頁。
- 21 前掲井原『好色一代男』、107頁。
- 22 柳沢淇園『ひとりね』、17頁。
- 23 前掲今西、53頁。
- 24 喜田川守貞『近世風俗志一守貞謄稿（3）』、266頁。
- 25 前掲今西、51-52頁。
- 26 前掲小野、84頁。
- 27 前掲小野、83頁。
- 28 前掲喜田川、295頁。
- 29 前掲錦織、146頁。
- 30 前掲喜田川、322頁。
- 31 武陽隠士『世事見聞録』、牧英正『人身売買』、Stanley Amy, *Selling Women: Prostitution, Markets, and the Household in Early Modern Japan* を参照。
- 32 上村行彰『日本遊里史』、212頁。
- 33 堀江宏樹『三大遊郭』、100頁。
- 34 輪違屋茶屋の当主である高橋利樹は、島原の太夫は上京の武家の娘や養女がふさわしかったと語っている。（高橋利樹『京の花街「輪違屋」物語』、87頁）。
- 35 前掲藤本、521-607頁。
- 36 牧英正『近世日本の人身売買の系譜』、163-166頁。

- 37 前掲堀江、203-204頁
- 38 下重清『“身売り”の日本史—人身売買から年季奉公へ』、130頁
- 39 例えば、『京の花街「輪違屋」物語』で高橋利樹は「太夫は農村生まれの子ではだめで、上京の武家の娘とか、農村の子でもいったん武家に養女に入った子とかが、まず禿になって、あらゆる芸を覚えて太夫になるわけです」と述べている（前掲高橋、87頁）。
- 40 前掲藤本、611-625頁。
- 41 前掲小野、32-33頁。
- 42 「京都町人の娘うのの身売り証文（1816）」（牧英正『近世日本の人身売買の系譜』創文社、1970、210頁）
- 43 Sm29 輪違屋文書 C-5 「遊女出稼御願はま」（京都市歴史資料館写真版）
- 44 Sm29 輪違屋文書 C-2 「遊女出稼御願ゆき」（京都市歴史資料館写真版）
- 45 前掲滝川、79頁。
- 46 曾根ひろみ『娼婦と近世社会』、22-23頁。
- 47 前掲堀江、170頁。
- 48 宮本由紀子「遊里の成立と大衆化」、191頁。
- 49 前掲今西、85-86頁。
- 50 前掲小野、190頁。
- 51 この遊廓流しは17世紀後半から江戸では何度も行われたにも関わらず京都では二回しか行われていない。
- 52 渡会恵介『京の花街』、25頁。
- 53 滝沢馬琴『壬戌羈旅漫録』、54頁。
- 54 前掲小野、203頁。
- 55 前掲小野、204頁。
- 56 「京都府下遊廓由緒」、103頁。

【付記】

本稿は、京都学・歴彩館「海外若手研究員受入事業」2018年度京都学研究員としての成果論文である。

（パリ大学（旧パリ・デイドロ（第七）大学）東洋言語学部日本学科非常勤講師）
（2019年9月23日受理、2020年8月30日審査終了）

1. 如法經信仰とは

（1）如法經とは何か

如法經というのは、一定の法式に従って尊号を書写することで、多くは、『法華經』すなわち『法華經』の写経を指しているという認識が最も一般的である。『法華經』